書道用語 200

- あ行
- か行
- さ行
- た行
- な行
- は行
- ま行
- や行
- ら行
- わ行

あ行

1	いたいじ 異体字	漢字の標準字体（正字）に対する語。音や意味は同じだが、字体が正字とは異なるもの。
2	いりん 意臨	臨書の一形態で、形臨に対する語。古典の、字形以外の要素（筆意）をくみ取ることに重点を置いて書くこと。
3	いろはうた いろは歌	仮名 47 文字を、同一の字を二度使うことなく、七五調にまとめた今様歌。手習いの手本として広く使われてきた。
4	いんこく 陰刻	刻字（石碑を含む）の彫り方で、陽刻に対する語。文字の部分を彫ることや彫られたものをいう。
5	いんてん 印篆	篆書の字体の一つで、方形の印に合うように工夫された書体。繆篆ともいう。
6	うんぴつ 運筆	筆の運び方のこと。速さの変化（緩急）や筆圧の変化によって、線の抑揚・軽重・強弱などを表現することができる。
7	えいじはっぽう 永字八法	「永」の一字に楷書の基本点画が全て含まれているとし、それぞれの点画の用筆法を示したもの。
8	えんぴつ 円筆	用筆法の一つで、方筆に対する語。起筆や転折などで、とがった角を出さず、丸みを帯びるように書くこと。
9	おうぎし 王羲之	王羲之（303 ？—361 ？）は、書道史上最高の能書で、「書聖」と仰がれている。楷書・行書・草書の名作が伝えられているが、真跡は一点も現存しない。官名から王右軍ともよばれる。
10	おうようじゅん 欧陽詢	欧陽詢（557—641）は、唐の四大家、初唐の三大家の一人で、特に楷書に優れ、「欧法」を確立した。弘文館学士を務めた。
11	おのこで(おとこで) 男手	仮名の一種で、漢字の楷書や行書を使って書かれた。真仮名ともいう。主に男性が用いたため、女手に対してこの名がついた。
12	おののとうふう（みちかぜ） 小野道風	小野道風（894—966）は、平安時代に活躍した能書で、三跡の一人。「屏風土代」「玉泉帖」などの真跡が現在に伝えられている。
13	おりじょう 折帖	製本の一種。折本ともいう。長い紙を一定の間隔で折り畳み、手本や鑑賞に便利なように、帖仕立てにしたもの。
14	おんなで 女手	仮名の一種で、男手に対する語。漢字の草書で書かれた草仮名をさらに簡略化したもの。主に女性が用いたため、この名がついた。

TOP

か行

15	かいし 懐紙	畳んで懐中に所持した紙ということから「懐紙」とよばれ、書きつけなどに使う。書の分野では、主に詩歌を正式に書き記すときに用いる料紙を指す。
16	かいしょ 楷書	漢字の書体の一つで、真書・正書ともいう。一点一画を崩さず、原則として起筆（始筆）・送筆・収筆（終筆）の三過折（三折法）で書く。
17	かいほうのきょくそく 楷法の極則	楷書の最高規範という意味で、欧陽詢の「九成宮醴泉銘」を称した言葉。
18	かけじく 掛軸	書や絵を、裂や和紙で軸物に表装したもの。床の間や壁などに掛けて鑑賞する。日本では室町時代の水墨画の流行とともに発展した。掛幅ともいう。
19	がごう 雅号	文人・芸術家・風流人などが用いる、本名以外の風雅な名のこと。「号」ともいう。一人で複数の雅号を持つ場合もある。
20	がせんし 画仙紙	書道や水墨画に使う紙のことで、中国産のものと、日本産の和画仙がある。大きさによってそれぞれ名称がある。
21	かっぴつ 渇筆	潤筆に対する語で、少量の墨を含んだ筆でかすれさせて書くこと。また、そのかすれ。潤筆と渇筆の照応のことを潤渇という。
22	かな 仮名	真名（漢字）に対する語。漢字の音を借りて表記したことから、仮の字ということでこの名がついた。
23	からよう 唐様	和様（日本風）に対する語で、中国風の書のことをいう。一般的には、江戸時代に流行した中国風の表現を指す。
24	がんしんけい 顔真卿	顔真卿（709―785）は、唐の四大家の一人。剛直な人物で、忠臣としても名高い。「顔法」を確立し、書法の革新者として王羲之と並び称されている。
25	かんすぼん 巻子本	巻物のことで、本の形としては最古の形態。絹や紙を長く継ぎ合わせ、軸を付けて巻き込み、表紙を付けた書物。
26	がんぽう 顔法	顔真卿の書法のこと。用筆は直筆で線が強く、字形は向勢にとる。楷書では蚕頭燕尾とよばれる独特の書き方をする。

TOP

27	きのつらゆき 紀貫之	紀貫之（生没年不詳）は、『古今和歌集』の撰者の一人で、その序文のうち「仮名序」を執筆した。また、『土佐日記』の著者としても知られる。
28	きひつ・そうひつ・しゅうひつ 起筆・送筆・収筆	筆が紙に触れるときの用筆を起筆、筆を運ぶ用筆を送筆、筆が紙から離れるときの用筆を収筆という。小中学校の書写では始筆・送筆・終筆という。
29	ぎゃくひつ 逆筆	順筆に対する語。起筆の際、いったん進行方向とは逆に筆を入れ、方向転換して送筆に入る用筆のこと。
30	ぎょうがき 行書き	散らし書きに対する語。行頭と行末をそろえ、行と行の間隔を等しく空けて書く書き方。
31	ぎょうしょ 行書	書体の一種で、隷書の速書きから生まれた。楷書より速く書けて、草書よりも読みやすいという特徴がある。
32	きょかく 虚画	実画に対する語。実画と実画の間を結ぶ、目に見えない筆の運動部分のこと。
33	きら 雲母	雲母という鉱物のこと。細かく砕いて粉末状にしたものを、料紙に装飾として撒いたり引いたり（塗ったり）した。
34	きんぶん 金文	篆書の一種で、青銅器に鋳込まれたり刻されたりした文字のこと。主に殷・周時代に使用された。
35	くうかい 空海	空海（774―835）は、三筆の一人。遣唐使船で唐に渡り、密教などのほか、王羲之や顔真卿の書を学んだ。真言宗の開祖で弘法大師ともよばれる。
36	ぐせいなん 虞世南	虞世南（558―638）は、唐の四大家、初唐の三大家の一人。高貴な家柄に生まれ、唐の太宗に最も信頼されていた。書を智永に学んだ。
37	くもがみ 雲紙	料紙の上部や下部を、それぞれ雲型に、藍色や紫色に染めたもの。「蓬萊切」に使われている。
38	けいりん 形臨	臨書の一形態で、意臨に対する語。古典の字形・用筆を忠実にまねて書くこと。
39	けっかく 闕画	欠画ともいう。皇帝や貴人、祖先の名に含まれる文字を用いるとき、はばかって点画の一部を省いて書くこと。

TOP

40	けっこう（ほう） 結構（法）	文字の点画の組み立て方のこと。一字の構成法のことで、間架結構（法）ともいう。
41	けったい 結体	結構とほぼ同じ意味だが、結構は文字の組み立て方をいい、結体はその結果としての文字の形のことをいう。
42	けんごう 兼毫	筆の種類の一つで、兼毛ともいう。馬などの硬い毛と、山羊などの柔らかい毛を何種類か混ぜ合わせて作った筆のこと。
43	ごうごう 剛毫	筆の種類の一つで、剛毛ともいう。硬い毛の筆で、馬の毛が主流だが、たぬきや鹿などの毛も使われる。
44	こうこつぶん 甲骨文	篆書の一種。殷時代に占いの記録を亀甲や獣骨に刻んだ文字のこと。現存する最古の漢字。
45	こうしびょう 孔子廟	儒教の祖、孔子を祀った所。曲阜を始め、中国各地に建てられた。唐の太宗は学芸振興のため、長安（現在の陝西省西安市）の孔子廟を再建した。
46	こうせい 向勢	背勢に対する語。向かい合う線が外側に膨らむ字形のことで、虞世南や顔真卿の楷書に多く見られる。
47	こてん 古典	先人が残した、過去の優れた筆跡のこと。時空を超えて普遍的な価値をもつもので、書道では一般的に、古典を手本として学習する。
48	こひつ 古筆	特に平安時代から鎌倉時代に書かれた和様の書跡の名品で、仮名の書を指すことが多い。
49	こひつぎれ 古筆切	巻子本や冊子本として保存されてきた古筆を切断したもの。主に茶室の掛軸や手鑑などに仕立て直された。
50	これい 古隷	隷書の一種で、八分に対する語。波磔のない隷書のこと。

TOP

さ行

51	さいじ 細字	小筆で書く小さい文字のこと。
52	さいちょう 最澄	最澄（767―822）は、空海らとともに遣唐使船で唐に渡り、帰国後、天台宗を開いた。伝教大師ともよばれる。その書は端正な王羲之風で、品格がある。
53	さがてんのう 嵯峨天皇	嵯峨天皇（786―842）は、三筆の一人。桓武天皇の皇子で、平安時代初期の唐風文化の中心的人物だった。空海との交流で影響を受け、書や漢詩文にも優れたことで知られている。
54	さっしぼん 冊子本	本の装丁形式の一つで、綴じ本のこと。日本では空海の「三十帖冊子」が最古の資料。
55	さん 賛・讃	書画に書き添えられた、その書画に関する詩や文のこと。
56	さんかせつ 三過折	一つの点画が、起筆・送筆・収筆の三つの用筆から成り立っていること。三折法ともいう。もとは右払いの筆使い（磔）を表した。
57	さんこう 三稿	顔真卿の行書三作品「争坐位文稿」「祭姪文稿」「祭伯文稿」（いずれも草稿）の総称。
58	さんしきし 三色紙	平安時代中期の代表的な古筆である「寸松庵色紙」（伝紀貫之）・「継色紙」（伝小野道風）・「升色紙」（伝藤原行成）の総称。
59	さんせき 三跡・三蹟	平安時代中期の和様の書の能書、小野道風・藤原佐理・藤原行成を指す。
60	さんとうえんび 蚕頭燕尾	起筆が蚕の頭のように丸く、右払いの収筆が燕の尾のように細くなる書き方。顔真卿の楷書の用筆の特徴を指す。
61	さんぴつ 三筆	平安時代初期の唐風の書の能書、嵯峨天皇・空海・橘逸勢を指す。
62	しきし 色紙	書画を書くための正方形に近い形の紙。大きさは大小さまざまある。元来「いろがみ」の意味で、平安時代には色染めをした紙を指した。
63	じげん 字源	書道では仮名のもとになった漢字のことを指す。字母ともいう。

TOP

64	じっかく 実画	虚画に対する語。紙面に書かれた文字を形成する一点一画のこと。
65	じゅうごう 柔毫	筆の種類の一つで、柔毛ともいう。柔らかい毛の筆で、山羊の毛が代表的。墨持ちがよいのが特徴。
66	しゅうじ 集字	古典から字を集めること。古典にない字は、部首や部分を組み合わせて字を作ることもある。王羲之の「集王聖教序」はその代表例で、「集字聖教序」とよばれる。
67	しゅぶん 朱文	白文に対する語。篆刻で、文字以外の部分を彫り、押印したときに文字が赤く浮き出る彫り方や印影のこと。
68	じゅんかつ 潤渇	墨のにじみとかすれのこと。筆に含ませる墨の量の調整や、運筆の速度の変化などによって生まれる。
69	じゅんぴつ 順筆	逆筆に対する語。起筆の用筆法の一つで、穂先をあらわにし、進行方向と同じ方向に入筆する方法。「九成宮醴泉銘」や「孔子廟堂碑」などの楷書の起筆が典型的。
70	じゅんぴつ 潤筆	渇筆に対する語で、筆にたくさん墨を含ませて書くこと。また、それによって表現された点画を指す。
71	しょうえんぼく 松煙墨	松材を燃やして煤を採り、膠で練り固めた墨のこと。一般的に青みがかり、濃墨にしても光沢がない。墨はこの松煙墨と油煙墨に大別される。
72	じょうがく 帖学	法帖を学ぶこと。清時代以降、青銅器の銘文や石碑の書を学ぶ碑学派が生まれ、王羲之や王献之をはじめとする法帖を中心に学んできた人たちのことを帖学派とよんで区別するようになった。
73	しょうそう 章草	漢字の書体の一つで、八分の点画が省略された、隷書から草書につながる書体。前漢時代後期以降に書簡などに用いられ、当時の木簡などにその例がしばしば見られる。
74	しょうそく 消息	手紙のこと。なかでも仮名を主体に書かれたものを指す。
75	しょうてん 小篆	篆書の書体の一つで、秦の始皇帝の時代に丞相の李斯が、それまで用いられていた大篆を整理して統一したとされる文字。「泰山刻石」や「権量銘」などが代表的。

TOP

76	じょうふく 条幅	一般に、画仙紙を縦半分に裁断したもの。
77	しょうほう 章法	紙面における字間・行間・文字の大小・字形や連綿の変化などを総合した構成法のこと。全体構成ともいう。
78	しょうよう 鍾繇	鍾繇（151―230）は、三国時代の魏の政治家。「薦季直表」や「宣示表」などが鍾繇の書といわれ、楷書の名手として知られている。王羲之もこれを学んだという。
79	しょしゃたい 書写体	活字体に対して手書き文字の字体を指す語。漢字の標準字体（正字）に対して、社会に通用してきた手書き文字の字体を指すこともある。
80	しょせい 書聖	書道史上最高の能書のこと。王羲之を指すことが多い。
81	しょたい 書体	文字の造形的な様式のこと。漢字には、篆書・隷書・草書・行書・楷書の五つの書体があり、それぞれ用筆や構造が異なる。活字体の明朝体・ゴシック体・教科書体などのフォントを指して「書体」と表現することもある。
82	しょとうのさんたいか 初唐の三大家	初唐時代に活躍した能書、欧陽詢・虞世南・褚遂良を指す。
83	しょふう 書風	書きぶりのこと。筆者の個性・目的・時代・地域・風土などによって異なる、表現上の特徴。
84	しょほう 書法	書を書くための法則のこと。執筆法・用筆法・章法・結構法・用墨法などが相互に関連して成立している。
85	しょろん 書論	書家やその遺墨・書法・書体・歴史などについて論じること。または、論じた文や書物。唐時代の孫過庭の「書譜」、日本の南北朝時代の尊円親王の「入木抄」など。
86	しんかん 宸翰	天皇の筆跡のこと。宸筆ともいう。
87	しんせき 真跡・真蹟	複製や偽作ではなく、当人が書いた筆跡のこと。真筆ともいう。

TOP

88	しんのしこうてい 秦の始皇帝	秦の始皇帝（前 259―前 210）は、前 221 年に中国全土を統一し、史上初めて皇帝を名乗った。丞相の李斯とともに文字や度量衡などを統一し、政治制度を整備した。
89	しんぴつ 真筆	真跡と同じ。
90	すうぇん・へでぃん スウェン・ヘディン	スウェン・ヘディン（1865―1952）は、スウェーデンの地理学者で探検家として知られている。中央アジアを探検し、楼蘭の遺跡で木簡や残紙を発見した。
91	せいじ 正字	漢字の標準字体。異体字や俗字などに対する語。
92	せきとく 尺牘	手紙のこと。なかでも漢文で書かれたものを指す。
93	せきひ 石碑	石に何らかの事跡を記念した銘文を刻して建立したもの。歌碑や句碑などもある。
94	せそんじりゅう 世尊寺流	書流の一つで、藤原行成を祖とする。行成の邸宅に建立された世尊寺の名を、子孫が家名に用いた。和様の書を代表する流派である。
95	せっぴつ 節筆	紙の折り目を筆が横断し、節のような筆画となって現れた部分を指す。孫過庭の「書譜」に見られる。
96	ぜんし 全紙	全判の画仙紙を指す。多くは縦約 136 ×横約 68 センチメートル。
97	せんそうぼん 剪装本	拓本を切断して台紙に貼り込み、折帖や冊子の形に装丁したもの。全揚本あるいは整本に対する語。
98	ぜんとうぼん 全搨本	石碑などから採った拓本を、切らずにそのままにしているもののこと。整本や全拓ともいう。
99	ぜんりん 全臨	対象となる古典全ての文字を臨書すること。
100	そうがな 草仮名	仮名の書体が男手から女手へと移行していく間に生まれた、草書で書かれた仮名。表現に多様性を与えるものとして、11 世紀以降も用いられた。

TOP

101	そうこう 草稿	清書に入る前の段階で、構想を仮の形にした下書きのこと。
102	そうこうてんぼく 双鉤塡墨	複製制作の方法の一つ。書の上に敷いた薄紙に筆跡の輪郭を写し取り（籠字）、その中を墨で塗り込めること。王羲之の「蘭亭序（神龍半印本）」「喪乱帖」などが代表的なものとして知られる。
103	そうしょ 草書	漢字の書体の一つ。篆書や隷書を速く書くために点画を省略したことから生まれ、後漢時代に書体として通行するようになった。
104	そうのしたいか 宋の四大家	北宋時代に活躍した四人の書の名手、蔡襄・蘇軾・黄庭堅・米芾を指す。蔡襄を除いた三人を宋の三大家ともいう。
105	ぞうほう 蔵鋒	露鋒に対する語。起筆の用筆法の一つで、穂先を包み込むように運筆する。
106	そくひつ 側筆	直筆に対する語。送筆の用筆法の一つで、筆を傾けて書く。また、そのようにして書いた線のこと。
107	そつい 卒意・率意	心のままであること。あらかじめ用意せずに執筆することをいい、作意に対して用いる。
108	そっかん 側款	印材の側面に刻される、刻した人の名前や日付など。
109	そみつ 疎密	文字や点画がまばらであることと密集していることを指す。文字の配置や行の構成などに際して用いることが多い。

TOP

た行

110	だいてん 大篆	篆書のうち、春秋戦国時代に秦を含む西方の国々で用いられた書体で、「石鼓文」が代表的。籀文ともいい、小篆に先行する書体。
111	だいばつ 題跋	巻子本などの書画の前後に書き入れられた文章や言葉のこと。前に入れたものを「題（題辞）」、後に入れたものを「跋（跋文）」という。
112	たくほん 拓本	石や木、金属器などに彫られたり、鋳込まれたりした文字や絵の上に紙を当て、墨をつけたたんぽなどを使って、それらを写し取ったもの。
113	たちばなのはやなり 橘逸勢	橘逸勢（？―842）は、平安時代の能書で、嵯峨天皇・空海とともに三筆に数えられる。遣唐使船で唐に渡った。「伊都内親王願文」は逸勢の手によるものといわれている。
114	だんかん 断簡	詩歌や絵巻などが書写された巻子本や冊子本を切断したものの一部のこと。「切」ともいう。掛軸や手鑑などに仕立てて鑑賞されることが多い。
115	たんざく 短冊	詩歌を書くための料紙で、寸法は縦 36 ×横 6 センチメートルほどのものが多い。歌会では懐紙に準ずる料紙として用いられる。
116	だんぴつ 断筆	点画の途中で意図的に筆を紙から離すこと。王羲之の「十七帖」（三井本）などに見られる。
117	たんぼく 淡墨	濃墨に対する語で、磨った墨を水で薄めたもののこと。
118	ちえい 智永	智永（生没年不詳）は、隋時代に活躍した能書で、王羲之七世の孫といわれている。真跡として「真草千字文」が伝えられている。
119	ちっかん 竹簡	竹の節を落として細長く割り、書写に適した大きさに整えた札のこと。主に紙が普及する以前に、文字を書く用材として使用された。
120	ちゅうほう 中鋒	穂先が点画の中心を通るように運筆すること。穂先を自在に八面に出すこともいう。また、長鋒・中鋒・短鋒として穂の長さをいう場合もある。
121	ちょくせんわかしゅう 勅撰和歌集	天皇や上皇の命で編纂された和歌集のこと。
122	ちょくひつ 直筆	側筆に対する語。用筆法の一つで、筆をまっすぐに立てて書くこと。また、そのようにして書いた線のこと。

TOP

123	ちょし 楮紙	楮という落葉低木の皮の繊維を主原料にしている紙のこと。穀紙ともよばれ、古くから書写に用いられている。障子やふすまに使用されることも多い。
124	ちょすいりょう 褚遂良	褚遂良（596―658）は、唐の四大家、初唐の三大家の一人。学問と人格に優れ、唐の太宗・高宗の二代に仕えた。「雁塔聖教序」「孟法師碑」などが知られている。
125	ちらしがき 散らし書き	和歌や俳句を書くときに、行頭の高さを変えたり、行間に変化をつけたり、いくつかのまとまりに分けて書いたりする書き方。
126	ついふく・ついれん 対幅・対聯	二幅で一対となる掛軸で、対句を書く形式。一般的に同一の表具を施す。
127	ていどうしょう 鄭道昭	鄭道昭（？―516）は、書を得意とした北魏時代の政治家。「鄭羲下碑」や「論経書詩」などの摩崖が知られ、おおらかで丸みを帯びた書風が特徴。
128	てかがみ 手鑑	厚手の紙で作られた折帖に古筆切や経切、色紙など、古人の優れた筆跡を貼り込んだもの。「翰墨城」「藻塩草」「見努世友」（いずれも国宝）などが有名。
129	てんかく 点画	文字を構成する基本的な要素のこと。漢字の基本点画には、点・横画・縦画・左払い・右払い・転折・反り・曲がりがある。
130	てんしょ 篆書	漢字の書体の一つ。甲骨文や金文、大篆や小篆などがある。
131	でんしょうひっしゃ 伝称筆者	古くから言い伝えられている筆者のことで、主に古筆に対して用いる。多くは江戸時代の古筆鑑定家によって付されたものが今に伝わる。「伝紀貫之」のように表記される。
132	てんせつ 転折	折れのこと。直角に近い形で筆路を転換する部分。
133	とうのしたいか 唐の四大家	初唐の三大家である欧陽詢・虞世南・褚遂良に、顔真卿を加えた唐時代の四人の能書のこと。
134	とうのたいそう 唐の太宗	唐の太宗（598―649）は、唐の第二代皇帝・李世民のこと。名君といわれ、その治世は「貞観の治」と称された。王羲之の書を好み、自身も書を得意とし、「温泉銘」「晋祠銘」を書いた。

135	とうもぼん 搨模本	原本の上に薄い紙を敷き、文字の輪郭を写し取り、墨を塗って複製したもののこと。
136	とりのこがみ 鳥の子紙	雁皮という落葉低木の樹皮を原料として厚手にすいた紙で、表面に光沢があるのが特徴。

な行

137	におう 二王	王羲之(おうぎし)を大王、王羲之の子供である王献之(おうけんし)を小王ということから、二人を合わせて二王という。
138	にくひつ 肉筆	印刷・印字ではなく、毛筆などの筆記具で人が書いた書や絵のこと。
139	のうしょ 能書	特に優(すぐ)れた書を書く人のこと。能書家ともいう。
140	のうぼく 濃墨	淡墨(たんぼく)に対する語で、濃(こ)く磨(す)った墨(すみ)のこと。また、粘液(ねんえき)状態の墨のこと。

TOP

は行

141	はいせい 背勢	向勢に対する語。向かい合った線が内側に反った字形のこと。
142	はいりん 背臨	臨書の一形態。手本とする古典を十分に学習した後、手本を見ないで書くこと。
143	はいれつ・はいち 配列・配置	紙面に合った文字の並べ方のこと。行の中心・文字の大きさ・字間・行間・余白などに注意して書くことにより、配列・配置が整う。
144	はくしょ 帛書	絹地に墨書されているもののこと。
145	はくぶん 白文	朱文に対する語。篆刻で、文字の部分を彫り、押印したときに文字が白く見える彫り方や印影のこと。
146	はせい 波勢	隷書において、波打つように、うねるリズムをもつ用筆のこと。
147	はたい 破体	一つの書作品の中で、複数の書体を交ぜ合わせて書いた書のこと。
148	はたく 波磔	隷書において、収筆を右に大きく弧を描くように払う用筆のこと。
149	はっぷん 八分	漢時代に生まれた典型的な隷書のこと。波勢や波磔が見られる。
150	はなちがき 放ち書き	仮名において、連綿に対する語。一字一字離して書くこと。
151	はんせつ 半切	全紙を縦に二つに切った大きさのもの。多くは縦約 136 ×横約 34 センチメートル。
152	ひじょう 碑帖	碑文を拓本に採り、それを帖仕立てにしたもの。また、碑版と法帖をまとめてよぶこともある。
153	ひそう 肥瘦	線の太い部分と細い部分のこと。
154	ひつい 筆意	用筆・運筆の際の筆者の心構えや心情のこと。筆者の表現上のねらいや特徴をいうこともある。

TOP

155	ひっしゃたい 筆写体	活字体に対して手書き文字の字体を指す語。書写体のこと。
156	ひっせい 筆勢	書画に表れた筆の勢いのこと。筆勢は、筆圧の強弱、運筆の遅速・緩急などの変化によって生まれる。
157	ひっち 筆致	書きぶりや雰囲気、趣などのこと。
158	ひっぽう 筆法	文字の点画を形作るときの、筆運びや筆使いをまとめたよび方。
159	ひつみゃく 筆脈	運筆の際、点画が気分的にも形のうえからも、連続したつながりをもつこと。
160	ひつろ 筆路	筆の通り道のこと。
161	ひりん 碑林	多くの石碑を集めて陳列している展示施設や博物館のこと。
162	ふぎょうほう 俯仰法	用筆法の一つで、筆の進む方向に筆管を倒す書き方。横画を書くとき、手のひらは上を向き（仰ぎ）、左払いのように左方向に進むとき、手のひらが下を向く（俯す）。
163	ふじわらのこうぜい（ゆきなり） 藤原行成	藤原行成（972―1027）は、平安時代の能書で、三跡の一人に数えられる。漢字の真跡として、「白氏詩巻」などがあるが、仮名の書で確証のあるものはない。
164	ふじわらのさり（すけまさ） 藤原佐理	藤原佐理（944―998）は、平安時代に活躍した能書で、三跡の一人に数えられる。「離洛帖」「国申文帖（女車帖）」などの真跡が現在に伝えられている。
165	ぶんかんふはく 分間布白	分間とは点画によって分割すること。布白とは分割された余白のこと。点画間を等しく整えることをいう。
166	ぶんぼうしほう 文房四宝	筆・墨・硯・紙のこと。
167	へんたいがな 変体仮名	平仮名には一つの音に対する複数の文字があったが、明治 33 年に一音一字に統一された。統一された文字以外のものを変体仮名とよぶようになった。

TOP

168	ほうしょ 倣書	学んだ古典の用筆や結体などをもとにして、別の字句を素材として書くこと。
169	ほうじょう 法帖	古人の優れた書を石や木に刻して拓本に採り、手本や鑑賞用として帖仕立てにしたもの。
170	ほうひつ 方筆	円筆に対する語。点画を角張らせた書き方のこと。
171	ぼくじょうひっけい 墨場必携	古人の詩歌や言葉などを集録して、書を書く際に参考とするための書籍のこと。市河米庵（1779―1858）が編纂したものがもとになっている。
172	ぼし 墓誌	故人の事績等を石などに刻して、墓の中に埋めたり建立したりしたもの。

TOP

ま行

173	まがい 摩崖	自然の岩壁(がんぺき)の一部を磨(みが)いたり、岩壁をそのまま利用したりして、文字などを刻したもの。
174	まがな 真仮名	万葉(まんよう)仮名と同じ。
175	まきもの 巻物	書画などを横に長く表装して軸(じく)に巻いたもので、日本固有の呼び名。巻子(かんす)本のこと。
176	まし 麻紙	麻(あさ)を原料とした紙のこと。紙の中ではかなり古いものになる。
177	まな 真名	仮名に対する語で、漢字のこと。
178	まぼく 磨墨	墨(すみ)を磨(す)ること。
179	まんようがな 万葉仮名	日本語を表記するために用いた漢字のこと。漢字の意味に関係なく、表音文字として使用された。『万葉集』の中で多く使われていることから、このようによばれている。
180	みなもとのかねゆき 源兼行	源兼行（生没年不詳(せいぼつふしょう)）は、平安時代中期の人で、当時第一の書き手といわれていた。「高野切(こうやぎれ)第二種」などの筆者と推定されている。
181	めいせき 名跡	有名な筆跡(ひっせき)や優(すぐ)れた書のこと。
182	もっかん 木簡	文字を記すために、木を細長く削(けず)り、短冊型にしたもの。

TOP

や行

ゆえんぼく 油煙墨	ごま油・菜種油・大豆油などを燃やして得た煤を原料として作った墨のこと。
ようこく 陽刻	陰刻に対する語。刻字（石碑を含む）の彫り方で、文字を凸に残して彫ることや、彫られたものをいう。
ようひつ（ほう） 用筆（法）	毛筆の使い方や穂先の働かせ方のこと。点画を書くときの起筆・送筆・収筆などの筆使いをいう。

TOP

ら行

186	らっかん 落款	書を書いたとき、最後に自分の名前を書いたり、印を押したりすること。
187	りくしょ 六書	漢字の成立や用法に関する、六つの原理（象形・指事・会意・形声・転注・仮借）のこと。
188	りくちょうしょ 六朝書	中国の南北朝時代の六つの王朝を総称して六朝といい、その時代の書を指して六朝書ということがある。慣例として北魏を主とする北朝の楷書を指すことが多い。
189	りゅうもんせっくつ 龍門石窟	中国の河南省洛陽市の南、伊水の両岸山壁を龍門といい、そこに造営された石窟寺院。
190	りゅうもんぞうぞうき 龍門造像記	龍門石窟の中に刻された造像記のこと。最も古い時代に掘られた古陽洞を中心に、龍門二十品とよばれる北魏を代表する造像記がある。
191	りょうし 料紙	主に仮名を書写するために使う加工紙のこと。
192	りんしょ 臨書	古典などの優れた筆跡を手本として書くこと。
193	りんち 臨池	書を学ぶこと、また書のこと。後漢の張芝が、池のほとりで終日書を学んだので、池の水が墨で黒くなったという故事に基づく。
194	りんも 臨模	手本や原本を見ながら書いたり、敷き写しをしたりすること。
195	れいしょ 隷書	漢字の書体の一つ。初期のものを古隷といい、後漢時代に盛行した波勢・波磔のあるものを八分という。
196	れん・れんおち 聯・聯落	聯は全紙を４分の１に切った大きさで、聯落は全紙から聯を取った残りの４分の３の大きさのもの。
197	れんめん 連綿	放ち書きに対する語。仮名の書で文字と文字をつなげて書くことをいう。文字と文字をつなぐ線のことを連綿線という。
198	ろほう 露鋒	蔵鋒に対する語。起筆の用筆法の一つで、穂先を露にして運筆する。

TOP

わ行

199	わし 和紙	日本特有の紙のこと。2014年、「和紙・日本の手すき和紙技術」として、島根県の石州半紙・岐阜県の本美濃紙・埼玉県の細川紙が、ユネスコ無形文化遺産に登録された。
200	わよう 和様	唐様に対する語。三跡によって発展・完成され、平安時代中期より明治初年頃まで展開した日本的な書風の総称。